

外部評価の対象課題概要

(評価対象課題概要様式)

普-03	普及指導課題	スイートピー高温耐性春咲き性品種の導入による生産性向上支援			取組期間			
	実施方針「課題」	県民ニーズに応じた安全・安心な農畜産物の生産・販売の取組みに対する支援			自	令和4年度		
部所名	普及指導部果樹花き課		担当専門チーム	果樹花き課3名				
活動対象	スイートピー作付経営体23経営体 (寒川町14、茅ヶ崎市3、海老名市3、座間市2、平塚市1)							
連携機関	JAさがみ、神奈川県花き・植木振興地域協議会							
1 課題	スイートピーは、ずらし作業等の管理労力が多く、規模拡大が難しい一方、管理温度が低く、単収が高いことから収益性に優れており、経営面積が狭小な本県において有望な作目となっている。しかし、冬咲き性品種を主力とする当管内では、近年の地球温暖化に伴う春季の気温上昇により、3月下旬以降の収穫量減少が問題となっている。そのため、気温上昇に対応した収穫量を維持する対策が必要である。また、かながわブランドでは「湘南のスイートピー」及び「海老名のスイートピー」と産地を2分しているが、産地規模の縮小により、ブランド力低下につながる可能性がある。							
2 目的	3月下旬以降の収穫量確保を目的に、高温耐性がある春咲き性品種の導入に伴う種子冷蔵処理技術の支援を行う。また、遮熱系被覆資材の利用と遮光方法の適正化による高温対策技術を支援する。併せて、ブランド力維持のため、県内産地の統合について支援する。			4 活動内容(主な普及指導手法) (1) 種子冷蔵技術の普及 (2) 高温対策技術の普及 ・個別巡回指導 250回 ・作付調査 37回(14～23経営体) ・講習会 6回 ・実証ほ 2ヵ所(R4年度)				
3 成果目標	・収穫量 170,000本/10aを維持 ・収穫期間 100日(R3)→115日(R8) ・春咲き系品種生産農家経営体数 2経営体(R3)→16経営体(R8)			※指導事項及び評価項目の変更があったため、回数については合算して計算。				
5 普及指導事項の年次目標・実績								
指導事項	評価項目(単位)	実施前	目標	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
			実績	R4	R5	R6	R7	R8
種子冷蔵技術の普及	種子冷蔵処理技術の導入経営体数(延べ数)	2	目標	4	6	8	10	16
			実績	0	3	13		
		達成度(%)		0%	50%	163%		
	冷蔵・栽培マニュアル作成数	0	目標			1(作成)		1(改訂)
実績					1			
達成度(%)				100%				
高温対策技術の普及	遮熱技術の導入経営体数(延べ数)	1	目標	2	3			
			実績	1	1			
		達成度(%)		0%	33%			
	遮光方法の適正化経営体数(延べ数)	0	目標			8	10	16
実績					10			
達成度(%)				125%				
産地の統合に向けた支援	産地(かながわブランド登録団体)の統合	2	目標					1
			実績					
		達成度(%)						

6 令和6年度末までの活動成果と評価

(1) 種子冷蔵技術の普及

①春咲き性品種種子冷蔵技術の実証、②春咲き性品種の特徴及び栽培特性の周知、③J Aさがみとの連携による種子冷蔵管理体制の構築、④研究協力のもと作成した種子冷蔵マニュアルを活用した指導を実施した結果、計13経営体で種子冷蔵技術の導入が進んだ。導入した経営体からは、3月下旬以降の品質が高かった、年内から採花ができたなど一定の評価があり、今後もさらなる普及が期待できる。

(2) 高温対策技術の普及

育苗期の高温対策として、当初はマルチによる遮熱を検討したが、効果に対して資材費の負担が高いため導入が進まず、導入技術を再検討し、遮光技術の導入に切り替えた。巡回指導及び講習会を実施した結果、計10経営体で寒冷紗による遮光技術の導入が進んだ。寒冷紗による遮光はマルチよりも手間がかからず、栽培方法の検討も不要なことから導入が容易であり、普及につながった。

7 今後の課題と取組

(1) 種子冷蔵技術の普及

経営体により採花期間と切花品質にばらつきが見られたため、種子冷蔵期間や冷蔵温度について検討する。また、冬咲き性品種と春咲き性品種では、栽培特性に違いが見られるため、適切な管理方法を検討し、栽培マニュアルの作成及び指導を行う。

(2) 高温対策技術の普及

春先の高温対策として、一部の生産者では遮光の実施を考えていることから、その使用方法について検討する。

(3) 産地の統合に向けた支援

高齢化に伴い産地規模が縮小しているため、2つのかながわブランド登録団体におけるブランド力維持に向けた新たな方策を検討する。

外部評価の対象課題概要

(評価対象課題概要様式)

北-02	普及指導課題	直売・観光用野菜及び地域特産果樹の安定生産技術の導入支援による地域農業の活性化			取組期間			
	実施方針「課題」	地域農業の振興を図るための取組みに対する支援 スマート農業の取組みに対する支援			自	令和4年度		
					至	令和7年度		
部所名	農業技術センター北相地区事務所		担当専門チーム	普及指導課5名				
活動対象	あぐりんずつくい出荷者組合（約100経営体）、相模原市いちご部会（5経営体）、相模原市果実組合（ブドウ部会10経営体、ブルーベリー部会16経営体）							
連携機関	相模原市、相模原市農協、神奈川つくい農協							
1 課題	旧津久井郡の区域は、J A大型直売所に出荷する経営体が多いが、端境期には地域外からの入荷が増えている。一方で、旧相模原市の区域は、都市近郊の利点を生かしたイチゴ観光園の需要が高いが、生産量が不足している。また、管内の果樹栽培ではブドウ及びブルーベリー生産者の高齢化が進んでいる。 これら直売野菜、観光用野菜、地域特産果樹の安定生産技術の導入を支援することにより、地域農業を活性化することが求められている。							
2 目的	大型直売所出荷者組合には直売品目の新作型・新品目の導入、いちご部会には施設内環境データを活用した栽培技術の導入、ブドウ部会やブルーベリー部会には省力化技術の導入を支援する。			4 活動内容(主な普及指導手法)				
3 成果目標	・あぐりんずつくいの地場農産物販売額 9,100万円(R2) → 9,500万円(R7) ・イチゴ観光農園入園者数(3月末まで、対象3経営体) 7,250名(R2) → 10,000名(R7) ・ブドウ販売額(対象3経営体) 1,100万円(R3) → 1,300万円(R7) ・ブルーベリー栽培面積(対象10経営体) 140a(R3) → 180a(R7)			(1) 野菜の新作型及び新品目の導入支援 巡回指導102回、講習会8回、展示ほ1回 (2) スマート農業技術を活用したイチゴの生産拡大支援 巡回指導109回、検討会13回、展示ほ2回、改善策提言1回 (3) ブドウ、ブルーベリー栽培における省力化技術の導入支援 巡回指導177回、巡回検討会1回、講習会13回、視察研修会3回				
5 普及指導事項の年次目標・実績								
指導事項	評価項目(単位)	実施前	目標	1年目	2年目	3年目	4年目	
			実績	R4	R5	R6	R7	
野菜の新作型及び新品目の導入支援	新作型導入数(延べ作型数)	6	目標	7	8	9	10	
			実績	7	8	8		
	達成度(%)		100%	100%	89%			
	新品目導入数(延べ品目数)	0	目標	1	2	3	4	
実績			1	2	2			
達成度(%)		100%	100%	67%				
スマート農業技術を活用したイチゴの生産拡大支援	施設内環境データの可視化に取り組む経営体数(延べ数)	0	目標	1	2	3	3	
			実績	1	2	3		
	達成度(%)		100%	100%	100%			
	栽培管理(改善策)の実践経営体数(延べ数)	0	目標	0	1	2	3	
実績			0	0	1			
達成度(%)				0%	50%			
ブドウ、ブルーベリー栽培における省力化技術の導入支援	ブドウの摘蕾櫛、花房整形器の導入経営体数(延べ数、対象7経営体)	1	目標	2	3	5	7	
			実績	2	2	3		
		達成度(%)		100%	67%	60%		
	ブドウ栽培における反射マルチの導入経営体数(延べ数、対象7経営体)	1	目標	2	3	5	7	
			実績	2	2	3		
		達成度(%)		100%	67%	60%		
	ブルーベリーにおける機械剪定技術の導入経営体数(延べ数、対象10経営体)	-	目標		1	3	5	
実績				1	3			
達成度(%)				100%	100%			

6 令和6年度末までの活動成果と評価

(1) 野菜の新作型及び新品目の導入支援

新作型8作型、新品目2品目について、JA大型直売所「あぐりんずつくい」の出荷者組合（約100経営体）を中心に情報提供を行い、新たに販売品目として雨よけ長期どりトマト、アーサイの2作型・品目が定着した。地場産農産物販売額は、R2年度は9,100万円だったのに対し、R6年度は9,332万円（酒類、工芸品類を除くと8,827万円）となり、うち206万円分の増加に寄与した。

(2) スマート農業技術を活用したイチゴの生産拡大支援

環境データの可視化により、R6年度より1経営体が循環扇を追加で設置し、ハウス内の温度ムラを軽減し、生育を均一化することができた。また、R5～6年度に2経営体が新たに環境データの可視化に取り組んだ。その結果、イチゴの増産が図られ、観光農園入園者数（5月末まで）は、R2年度は約14,000名だったのに対し、R6年度は14,620名と約4%増加した。

(3) ブドウ、ブルーベリー栽培における省力化技術の導入支援

ブドウ部会では、講習会等で作業の省力化を図る器具等を紹介・実演した結果、新たに摘蕾櫛を1経営体が、花房整形器を1経営体が、反射マルチを2経営体が、導入した。ブルーベリー部会では、実際に普及指導員が電動バサミや電動ノコギリなどを使用した体験に基づいて啓発した結果、新たに電動バサミなどの機械剪定技術を3経営体が導入し、省力化技術が普及した。その結果、ブドウの販売額は、R3年度の1,100万円に対し、R6年度は1,800万円となり、ブルーベリーの栽培面積は、R3年度140aに対し、R6年度は160aとなった。

7 今後の課題と取組

(1) 野菜の新作型及び新品目の導入支援

他作目との作業競合など課題があり、新作型及び新品目の定着率（20%）が低いことから、今後は、これまでに導入した新作型及び新品目を中心に、生産安定について技術支援を行う。

(2) スマート農業技術を活用したイチゴの生産拡大支援

環境データが十分に栽培管理へ活用されていないことから、今後は巡回指導を通じて、環境データの活用により改善が可能な項目を抽出し、栽培技術の向上支援を行う。

(3) ブドウ、ブルーベリー栽培における省力化技術の導入支援

ブルーベリーの機械剪定技術は、作業性を高め労力軽減につながることから、引き続き導入支援を行う。